

Observatory. Despite the short period, I felt the plain-Jane friendship from Kitai-sensei, Ueno-san, Nogami-san, Katoda-san, Kimura-san, I would say that it was not just friendship, it was like the love from my own relatives. They were just like my relatives at first sight. Even when I first met with them, it seemed as if we had known each other for years. During my stay in Kwasan Observatory, I was also taken care of by many many other friends, e.g., the family of Kurokawa-sensei, Makita-sensei, Kubota-sensei, secretaries like Nakaoka-san and Kamobe-san



From then to now, I have traveled to many other countries. However, I never met a group which makes me feel no any psychological distance from them. That could be called Yuan in Chinese and Go-en in Japanese.

This year is the 80th anniversary of Kwasan & Hida Observatories, and actually is also the 10th anniversary of my visit to Kwasan & Hida Observatories. I am and also will always be proud that I have been part of the world-renowned observatories. I am proud that I was a Kyodai-jin. I am also happy to see young Kyodai-jin like Isobe-san and Asai-san have grown up. With the SMART telescope and the NPO facilities, Kwasan & Hida Observatories are being met with a prosperous future.

Kwasan-no ashita-wa Oh-Oh-Oh-Oh-Oh.....

花山天文台の80周年を祝って

日江井 榮二郎

東京大学名誉教授、国立天文台名誉教授、明星大学名誉教授

花山天文台に始めてお邪魔したのは、京都で日本天文学会が開催された時だったと思います。久保田諄さんの案内で太陽館を見せていただきました。ウイルソン山

天文台のスノー望遠鏡と同様に、シーロスタット一分光器系が水平方式を採用してあるので、シーロスタットのセットのためには、便利だなという印象を持ちました。というのは、東京天文台（現在の国立天文台）のインシュタイン塔望遠鏡は垂直方式なので、セットの為に何度も5階上の場所まで階段を上り下りして苦勞していました。何よりも感心しましたのは、シーロスタットの大きさと、分光器室内の立派な装置でした。それが飛騨天文台の発展に繋がったのでしょうか。その後、宮本先生がお使いになっているという屈折望遠鏡を拝見しました。惑星の観測には屈折望遠鏡が良いのだという信念のもとに、ご使用されているとのことで、そこは塵一つ無い神聖な場所という印象を持ちました。

丁度昼時になってしまい、昼食をご馳走になりました。斎藤澄三郎さんが居られて、今日は宮本先生と一緒に食事をとられると話してくれ、一瞬緊張感を覚えました。宮本先生については、先生の明解な御著書でしか知りませんでした。また、東大・天文の同期学生が、宮本先生に憧れて京都までお会いしに行き、その彼から先生の印象を聞いていまして、先生には尊敬と畏怖の念を抱いていました。各自が食卓を囲み、カレーライスの皿を各自の前に置き、静かに先生のお出ましを待っていました。宮本先生がご自分の場所に座られ、皆で戴きますと述べてから食べ始めました。その躰のいきとどいている事に感心しました。

日本天文学会の理事長を宮本先生、副理事長を末元さんが勤めるという時期がありました。私は一理事として理事会に出席していましたが、そのときから、宮本先生と話すようになりました。宮本—末元 ラインは、それ以前から兆しがあったようですが、理事会の運営を見ていると、両者の連携が実によく行われていたと思います。飛騨天文台建設に関わって文部省への推薦文を末元さんも書かれました。宮本—末元 ラインのお蔭で、太陽関連の両方の弟子たちが互いに親密になっていき、天文学会の折には、東京・京都の弟子共の談笑する声が大きくなった気がします。高山で開催された天文学会の折に、同宿の天文屋が大勢で雑談をしていた時、京大の人がやってきて、京都側で、大雨見山に、予算規模の大きい太陽望遠鏡を作るそうですが、東京のほうで作らなくて京都に作らせてよいのかと話にきました。私も末元さんから建設計画の概要を聞いていたので、立派な計画なので、ぜひ実現に協力したいと話したら、その人はあきれた顔をして離れていきました。そのとき、飛騨天文台建設には予算獲得のための努力もさることながら、内憂も大変だなと思いました。宮本先生・服部昭さんや花山天文台で太陽研究をされていた方々の努力の賜物で飛騨天文台が完成できたのだと思います。

花山天文台には立派な理念を生かそうとした歴史を持っています。初めて拝見したシーロスタット一分光器系の巨大さに、世界に冠たる装置を作ろうとした理念を感じました。当時の日本は未だ観測天文学では世界の流れからは遅れをとっていましたが、それを乗り越えようとした志です。しかし、その理念を実現するため、花山天文台の関係者は様々な苦勞をされたに違いありません。そういう花山天文台の80年の歴史があり、その経験が見事に飛騨天文台に生かされたからこそ、飛騨天文台で数々の成果が生まれたのだと思います。

かつてMachadoと国際会議について話をしていた時、天文学の諸分野の連中に較べて、世界中の太陽屋の仲間は気持ちを通じ合って、なかなか好いなと意見が一致したことがあります。同じ太陽を研究しているからでしょう。これからも、将来に向けて東西手を取り合って協力し合って、精進していきたいと願っています。

花山天文台80周年に寄せて

藤原 洋

株式会社インターネット総合研究所 代表取締役
株式会社ナノオプトニクス・エナジー 代表取締役

最初に、花山天文台関係者の皆様、80周年を迎えるに当たり心からお祝い申し上げます。また、これまで80年にわたる伝統と歴史を築いてこられた諸先輩方はじめ現役の皆様にご敬意を表させていただきます。私は、現在の柴田一成台長の同級ですが、大学卒業後、天文学者にはならず、産業界に出てしまったので、約30年間は、少し遠くから当天文台の発展を見させてもらってきました。ところが、縁とは不思議なもので、4年前に、柴田台長から久々にかかってきた電話が、きっかけとなり、アジア最大の直径3.8m新技術望遠鏡開発と建設を支援させて頂くことになり、当天文台の将来へ向けて日夜奮闘することとなりました。そこで、私見ではありますが、一企業家として、当天文台の歴史を振り返ると共に、未来への展望について一言述べさせていただきます。

花山天文台のスタートは、世界大恐慌ブラック・サースデー（10月24日）の起こった1929年でした。世界経済の景気後退と経済危機へと突入する中での「苦難の船出」となったはずです。最近、かつて好景気で我が世の春を謳歌していた投資銀行の人々が高給の職を失い、一斉に暗い顔をしているのを見るにつけ歴史は繰り返すのだなと思う今日この頃です。今から思えば、偶然なのでしょうが、ちょうど世界大恐慌開始年に合わせて、天文台を始動させたところが、生まれながらに非世俗的で、今年、再び世界大恐慌を迎えている年に80周年を迎えるところが花山天文台らしい気がします。というのは、宇宙が生まれて137億年、太陽系が生まれて50億年、生命が生まれて40億年、ヒトが登場して100万年、人間文明発祥から1万年とすると、人間の負の欲望＝金銭欲の破局としての80年周期（？）で世界大恐慌が起こるウォールストリートとは対照的に、同時期に80年の長きにわたって、137億年の宇宙を見つめ続けてきた花山天文台は、人間の正の欲望＝知的好奇心が湧き続けてきた場所であり、私たちにとっての「聖地」であると思えるからです。

それでは、私たちにとっての「聖地」＝花山天文台の歴史を少し繙いてみたいと思います。初代台長の山本一清先生（台長：1929～37年）は、日本最古の歴史を誇る東亜天文学会を結成されるなど、プロとアマの橋渡しに尽力されました。この時代既に、天文学にとって重要な要素である、青少年に科学的好奇心を喚起し、一般